

「フランス」文学とは、どこの文学なのか？

塩谷 祐人

「フランス文学とはどこの国の文学なのか」という問いは、ソヴィエトに生まれ、フランスに移り住み、現在フランス語で執筆しているだけでなく、アカデミー・フランセーズの会員も務めるアンドレイ・マキーヌの例などを考えてみると、そう単純に答えが出るものではないとわかる。

ここでキーワードとなるのは「国民文学」と「世界文学」である。とりわけ19世紀の国民国家の成立と国民文学の誕生は、国と文学の結びつきを生み、それはまた同時に、「世界文学」というゲーテが提唱した概念を強調するようにも働いた。各国民文学同士の間に関係が生まれたとき、それぞれの国民文学が国家装置として機能し、それぞれの国が文学資本を所有し、複数形の「文学」による地理学ができあがったのである。こうして文学資本を国有化していく力学によって、フランス文学は外国出身の作家でさえもフランス文学を形成する作家として結びつけ、外国からやってきた作家の作品も自らの文学資本の一部としてきた。それゆえマキーヌのような国境を越えた作家は、逆説的にも国という括りとは無関係であるどころか、常に所属の問題との関わり合いを余儀なくされる。だがここでは、その所属がどこにあるのかを問うことが重要なのではない。「その所属が常に問題になる」こと自体に意味がある。なぜならそれは、文学と国という現実的な結びつきを避けることが、いかに困難であるかを我々に突きつけるからである。

マキーヌは、処女作『ソヴィエト連邦の英雄の娘』を発表したときは、フランスの作家とみなされていない。外国人がフランス語で書いた作品は出版される可能性が低いと考えたマキーヌが、架空の訳者を作り出して出版社に売り込んだからである。彼が本格的にフランスの作家とみなされるようになったのは、『フランスの遺言書』がフランスの大きな文学賞を受けてからである。これを境に、マキーヌは急速にフランス文学のシステムに組み込まれていく。その延長線上にアカデミー・フランセーズ会員への選出も位置付けることができるだろう。それは、成功を収めた優れた作家を、フランスの文化を体現するものとして内部に取り込むことにほかならないからである。

ここで状況が複雑になるのは、マキーヌは「フランスの作家ではない」とも言われるからである。『フランスの遺言書』以来、マキーヌはフランス文学のシステムに組み込まれていった一方で、そこには幾分かの保留が常になされ、「フランス語で書くロシアの作家」と紹介されることも稀ではなかった。実際、彼のフランス語が現代のフランス人の書くフランス語とは違うという指摘は、彼の文体を語る際の常套句となっている。また小説の内容に関しても同様である。マキーヌの作品の多くは彼の祖国が舞台になっており、フランスとソヴィエトの二つの社会の狭間にいる人物たちの人間的な生き方や切ない愛が主題として扱われ、それらは確かにフランスの読者のエグゾティズムを刺激するものになっている。こうしてフランス文学でありながら、フランスの文学ではないというパラドクサルな立場が生まれるのである。

このパラドクサルな状況を生み出すことこそ、越境した作家の特徴であり、「フランス」文学とはどこの国の文学かという矛盾した問いを生み出しうる新たな力である。

国民国家および国民文学という概念が発達した19世紀以降、国家、国語そして文学を含めた文

化は、強い結びつきをみせてきた。そうした中でフランスは、外国出身の作家たちもフランスのものとして計上してきた。これをフランスのナショナリズムや中央集権的な性質と批判することは容易だろうが、必ずしも問題はそこにあるわけではない。とりわけ絶対王政以降蓄積されてきた豊かなフランスの文化資産、そしてそれを支えてきたフランス語という極めて強い力をもっていた言語が、外国人たちを引きつけてきたことは事実であり、フランスが作品を評価し、普遍的なものであると承認する役割を果たしてきたこともまた事実だからである。フランスは国有化と普遍的化の相反する機能を、文化の名において果たしてきた。そしてそれはまさに、越境した作家たち自身が強めてきた神話でもある。ここに越境した作家と所属を要求する国との相互補完的な関係が見て取れる。フランスに越境した作家たちは、フランスの作家としてその作品の普遍的な価値を認められ、またメジャー言語のフランス語を通すことで、世界文学の領野に入ることが可能になる。一方で、フランス文学は彼らを内部に取り込むことで、より多様な文化資産を国有化し、手に入れることができているのである。

こうした見方が例外的でないのは、マキーンをはじめ、外国出身の作家たちがフランスの作家として扱われながらも、外国人である特異な面が強調されるという状況が証明している。フランスの作家となり、アカデミーという極めて国家的な機関に属し、いまやフランス文学の棚に置かれる一方で、ロシアの文脈でも語られるマキーンは、こうしたフランスの一面を照らし出しているのである。

このような国家的な文学システムの一部として作家を捉えるやり方は、文学の普遍性や自律をないがしろにするアプローチであるようにみえるかもしれない。そのため、作家を国家的なシステムの一部としてのみ扱うような見方はすべきではないと、誤解のないように付け加えておきたい。注目すべきは、フランスの文学の同化作用と作家の思惑や理想のせめぎ合いなのである。なぜならそのせめぎ合いこそが、フランス文学という枠組みを内側から広げ、フランス文学と世界文学という2つの領野を、互いに打ち消しあうことなく接続できる可能性を我々に示しているからである。

「フランス文学とはどこの国の文学か」。それはフランスという国の文学であると同時に、あらゆる国の文学にもなりうる文学である。そしてあらゆる国の文学を内包できるのはフランスであるという自負が、フランスの文学システムには現れている。それが今後のフランス文学をどう決定していくのか、注目していきたい点である。そしてこれはフランスに顕著に表れているとはいえ、現在ではどこの国の文学にも無関係な出来事ではない。イギリス文学とは、ドイツ文学とは、スペイン文学とは、中国文学とは、韓国文学とは、そして日本文学とは、一体、どこの国の文学なのか。フランスの例は、こうした質問を我々に投げかけている。